

コラム

# 伝統文化を支える

かつら ふくりゅう  
桂 福龍  
落語家

## 1 落語との出会い

幼い頃からエンターテイメントへの興味が強く、マジックやバルーンアートなどのパフォーマンスを人前で披露してきた。人を笑わせるのが好きで、これをしたらどんな反応をするだろうと想像するとワクワクした。今はプロの上方落語家・桂福龍として、高座から観客の笑顔を見るのが楽しくてしょうがない。高校でなぜか日本語の授業を選択したことが、当時は想像もしなかった現在の姿につながっている。日本文化に興味を持って2001年にカナダから来日した時には、落語の存在は全く知らず、予想外に長くなった日本生活が10年過ぎた頃、初めて日本人の友人から「落語」というものについて聞いた。「座布団一枚のやつ？」と某テレビ番組を思い浮かべながら答えたところ、友人が「それは本当の落語じゃないよ」と教えてくれた。英語落語の先駆者である桂枝雀師匠のビデオを紹介され、その話術と一人ですべての役を演じる日本の伝統芸能と英語の融合にあっという間に魅了された。友人に英語落語のグループを紹介してもらい、それからは自ら台本を翻訳して英語落語の稽古や寄席に没頭していった。

## 2 落語とは??

落語は「舞台上で一人の人間が物語のすべてを語る」日本の伝統的な話芸。落語家は老若男女のみならず、動物の役まで、口調や声色、表情、ジェスチャーを変えて演じ分ける。諸説あるが、落語は江戸時代に生まれ、お坊さんやお寺で村人に講じた説教が始まりというのがその一つ。時代とともに噺は変化してきたが、根本には道徳を教えよ

うとする意図があるとされている。そういわれると堅苦しい噺ばかりなのかと思うが、身近な場面の些細なトピックを取り上げ展開されるものもたくさんある。またコミカルな噺が多いように思われているが、情緒たっぷりな噺もあり、噺によって全く異なる世界に没入できる。短いものでは10分程度から、長いものでは30分以上も続く。関西の「上方落語」と関東の「江戸落語」でも大きな違いがあり、上方落語はお囃子(太鼓、笛、三味線など)や効果音が付くことが多く、また屋外で生まれたため、観客の注意を引くために大きな声や身振りが使われる。一方、伝統的な江戸落語は室内で生まれ、使用するのは座布団、手ぬぐい、扇子だけ。落語の発祥が関西が関東かについては昔から論争があったりするが、共通していることは「時代を超越しているところ」だと思う。

落語は約400年の歴史があるが、初期の頃の噺が現在も演じられている。長い歴史の中で同じ噺が多く、落語家によって演じられてきた。ファンは噺のオチが分かっているにもかかわらず、何回も見に来て楽しんでくれる。その理由は、落語家それぞれに「持ち味」があり、同じ噺でも同じように語る人がいない、そして(観客には)同じように聞こえないからだと考えている。また同じ落語家であっても、毎回語り方を変えたりして、それぞれの公演で唯一無二の噺が演じられるからだ。だからこそ落語家も観客も飽きるということがなく、現代まで引き継がれてきた伝統芸能なのだと思う。若い世代に理解されず廃れていくのは、ただただ「もったいない」の一言に尽きる。

### 3 上方落語家への道のり

落語の面白みや魅力にどんどんはまっていき、寄席で英語落語を披露したり、プロの落語家の稽古に参加させてもらったりして経験を積んでいたが、正式な弟子とは認められないまま、5年ほど経ってしまった。プロの落語家になるためには、まず「師匠」となるプロの落語家に弟子入りする必要があり、日本人でも狭き門であるのに、その上外国人ということもありチャンスをなかなか掴めなかった。それがある日、上方のトップ落語家の一人・桂福團治師匠と話をする機会を得たことをきっかけに、(今でも信じられないくらい幸運だと思うが)弟子入りさせてもらえることになり、2016年よりプロとして上方落語家の道を歩むことになった。

伝統話芸の落語は当然のことながら言葉の使い方が非常に重要で、その上多くの古典落語の舞台は江戸時代で、使う言葉が現代とかなり異なっている。そのため現在は、噺の時代に没入しながらも観客が内容を理解できるように、現代に近い大正時代の言葉を使用することが多く、日常で使わない言葉に戸惑うことがよくあった。加えて重要だったのが、上方落語に不可欠な関西弁をマスターすること。関西弁で語ることで、地元の観客により響くリアリティある噺ができる。カナダ人の私には、常に言語と文化、さらに時代の壁がついて回る。落語家である限り一生向き合い続ける課題、生涯挑戦と修業が続くのだろう。噺を学ぶために文化、時代背景や言語のニュアンスを完璧に理解すること、またすべての噺において真実味がある語りができるよう練り上げるには、一生でも足りないかもしれないと感じている。

ある先輩落語家が、落語の修業の厳しさを「懲役」に例えたことが印象に残っている。師匠の荷物運びから、高価な着物の手入れ、家全体の掃除に至るまで、弟子としての仕事は盛りだくさんあって、失敗すれば師匠だけでなく兄弟子たちか

らも厳しく指導される。「最低でも3年間は刑務所に入り、その後“出所”する」といわれた表現が、言い得て妙と感じる瞬間があった。それでも尊敬する師匠や兄弟子との時間を通して得た知識や経験はかけがえがなく、そのすべてが上方落語家・桂福龍を作り上げてくれたと思っている。

### 4 世界へ、そして未来へつなぐため

これまで海外公演の機会が幾度かあったが、落語の世界進出で一番大きな障害となるのはもちろん言語である。落語ではダジャレやオチが意味ある役割を持っているが、他の言語に翻訳するとそれがうまく機能しない。翻訳して英語落語を作る際には、日本語版とは異なる新しいダジャレやオチを作って入れるなどのアレンジを加え、英語でもスムーズでより意味のあるジョークにすることを心がけている。英語圏の文化を知っていて、馴染みがある私だからこそ作れる噺や世界観があるはずだと考えている。基本は変えず、古典落語とアレンジを混ぜた新たな落語の一面を含め、他の国へもどんどん落語の魅力を発信していきたい。

一方、国内では小中高校で英語落語を公演したり、噺の演じ方などを教えるワークショップを行っている。英語と伝統芸能のコラボレーションという、これまでと違ったアプローチ方法で、若者世代が落語にふれるきっかけになっていると感じる。興味を持って寄席に来てくれる学生たちもいる。伝統芸能をつないでいく落語家の数も過去最多に増えており、同じような志を持った同志がたくさんいる。国内だけでなく、海外でも落語人気は高まっている傾向にある。伝統芸能の存続や保存が心配される中、それほど悲観しなくてもよいのではないかと感じる。たとえそうでなくても私がやることに基本変わりはなく、観客の「笑顔」を見るために全力で語り、演じることだけなのだが、これからもこのユニークな伝統芸能を世界へ、そして未来へつないでいくための修業と活動をひたすら続けていきたい。